

国際会議 “縄文文化からスター・カーへ” に参加して

平口 哲夫・富岡 直人

1995年9月4日から9月8日にかけてイギリスのケンブリッジ大学ニューホールおよびダラム大学を会場に、奈良国立文化財研究所の松井章氏、ケンブリッジ大学のリアナ・ヤニック女史とサイモン・ケイナー氏、ダラム大学のピーター・ロリー-コンウィ氏を主催者として、“縄文文化からスター・カーへ(From the Jomon to Star Carr) : 温帯ユーラシア大陸東西の狩猟・採集民についての国際会議”が開催された。

この学会の主旨は、日本の縄文文化とヨーロッパの中石器文化に焦点をあて、温帯ユーラシア大陸東西の狩猟・採集民についてなされているさまざまな研究の発表を通して、各地域の比較を試みるとともに各国研究者の交流を計るというものであった。日英をはじめ韓国、中国、アメリカ、カナダ、ノルウェー、デンマーク、オランダ、ロシア、ポーランド、スロベニア、イタリア、計13カ国の発表者による52の演題が示唆するように、遺跡・遺物の事例研究から概念・理論に関するものまで広範囲におよぶ内容の発表と討議が行われた。

筆者らはこの原稿を書くために、独自に簡略な和文要旨集を作成したが、紙数の関係上、一部しか紹介することができない。末尾に発表者・演題一覧を掲載することでご容赦いただきたい。日本人発表者の演題については和訳にあたって本人の確認をえるように努めたが、原稿提出までに間に合わなかった例もある。また、日本側の発表内容については、国内出版物で目に触れる機会が多いので、本編では海外のトピックスに重点をおいた。

【第1日目】9月4日

まず「縄文文化と中石器文化」と題した導入部(第1セッション)において、今回会議のサブテーマについて主催者から説明があった。かつて縄文文化を新石器文化とみなすか中石器文化とみなすかと

いう論争があったが、どちらが妥当かというよりも、「縄文時代から弥生時代へ」と「中石器時代から新石器時代へ」という、温帯ユーラシア東西における狩猟・漁撈・採集経済段階から農耕経済段階への過程におけるさまざまな問題を比較検討することが重要であるとの認識が示された。

ついで第2セッション「更新世から完新世への変遷」、第3セッション「社会、象徴、宗教」について発表が行われた。このうち発表が多く議論が白熱したのが第3セッションである。特に中石器時代社会における「複雑性(complexity)」が主要な論点となった。具体的には、遺物の多さや遺跡の大きさから推定される「定住性(sedentary)」や人間活動(特に労働)の「集中性(intensity)」のみで社会構造の複雑さを指摘する事の誤りがあいついで指摘された。このような問題意識は、中石器文化や縄文文化などの「非農耕文化」が、農耕をとともなう典型的な新石器文化とどのように異なっているのかという点に深く根ざしており、後半での研究発表にも引きつがれ、考古学的事実から社会や技術の水準を判断する方法について一貫した議論を導くことになった。個別事例の研究では貝製品の製作技法や遺物の遠距離移動(交易)など、日本人研究者になじみやすい実証的研究も紹介された。

当夜、三内丸山遺跡、デンマークのテュブリン・ヴィ遺跡(Tybrind Vig)、極東シベリアのボイスマン湾(Boisman Bay)の調査がビデオで紹介される予定であったが、VHS規格の不一致のため中止となった。ただし、三内丸山を除いては、9月6日の移動バス中でビデオを見ることができた。

【第2日目】9月5日

最も多数の発表が行われた第4セッション「生態と生業」では、環境考古学的な取り組みの事例研究とともに、具体的に遺物・遺跡に基づいた分析か

ら文化・経済とその画期をどのように定義し把握するかが論じられた。

ヤニック女史とジョーンズ氏による共同発表は、中石器文化、新石器文化、青銅器文化における生業・生産様式を食物網のなかで捉え、非農耕の中石器時代のほうが後続の時代よりも広い資源収集が行われることや、家畜・土器を利用した貯蔵の役割について検討し、文化的な画期やその意義を論じた。特に採集・狩猟文化に家畜飼養や植物栽培的な方法を取り入れることは、食料獲得の方法をより多角化したものと捉えていることと、それが過渡的な様相ではなく、長い年代連続しえる生業戦略であるという主張は、縄文文化における植物栽培・稲作について我われが抱いている考えと一致するところがあり興味深かった。

ヨーロッパの場合、縄文文化についての生態・生業研究に比べて、植物質資源の研究が盛んであるが、なかでも調査例の紹介として印象深かったのは、ポール・メラース氏の発表であった。これは、スター・カー遺跡の遺構・環境のあり方を花粉分析、ならびに木質遺物や種実についての精緻な分析を通して、社会集団のあり方を検討した意欲的な研究である。この分析の際に、細長いトレンチから横ざまに鉄製のバスケット状の枠を差し込み、層を切りとるといった手法をとっている。これを研究室に持ち帰り、ピンセットなどを利用して再発掘を行なったという。

極東ロシアのボイスマン湾における環境変化と人類活動の歴史を総括したユーリ・ポストレツォフの発表は、日本でも出土土器群をはじめとする文化内容が注目されているボイスマン 1 遺跡の内容を含んでいるだけに興味深かった。

夕方、ダウニング街にある、考古学・人類学の大学博物館でレセプションが開催され、スター・カーをはじめとする重要なコレクションを見学しながら盃を交わした。

【第3日目】9月5日

ドラムへの移動の途中、フラグ・フェン遺跡とスター・カー遺跡を見学した。

フラグ・フェン遺跡(Flag Fen)は、ピーターボロ

ウ(Peterborough)に所在する新石器時代の紀元前4000年から紀元3世紀にかけて形成された遺構群を残す低湿地遺跡であり、新石器時代の埋葬土壌群、青銅器時代の溝で区画された遺構群と数多くの出土遺物、鉄器時代の集落跡などで有名である。遺跡発掘の中心となってきたフランシス・プライアー氏に案内いただいた。遺跡では発掘調査を継続しながら、展示にも心をくばり、付近の植物相や動物相の復元をはかり、復元住居や丸太列の保存展示館、家畜の小牧場などがつくられている。遺跡の保存を遺跡景観、環境の復元として捉えている点が特に感銘深かった。

スター・カー遺跡は、スカーボロウの南方に所在する中石器時代の遺跡である。J.G.D.クラークによって、先史人類の環境・生活を復元するための様々な取り組みが行われたことで本遺跡は日本でもつとに有名である。周囲には50年代と80・90年代に調査された中石器時代の遺跡が点在している。なだらかな丘も平地もすべて農地と化しているので、丘の上から遺跡周辺を一望することができる。しかしながら、周囲の景観・地形は発掘当時から大きく変化しており、標柱の一つもない状況にやや拍子抜けの思いがした。

【第4日目】9月7日

第5セクション「領域性と景観(Territoriality and Landscape)」と第6セクション「遺跡内分析」の各発表では、個別分析の報告とともに、社会考古学や象徴考古学、空間分析の視点も織り込んだ取り組みが紹介された。

「領域性と景観」については、日本人研究者の多くが時期を区切った個別の研究例を基礎としたのに対して、西欧の研究者の多くが通時代的に遺跡を検討しマクロな環境変化を論じようとした点で際だった違いをみせていた。中石器時代から新石器時代にかけての西ノルウェー海岸部にみられる遺跡群のあり方を遺物や生業活動の違いから社会考古学的に論じたベルグスィーキ氏の発表は、物質流通のモードの時代変化を端的に示しており理解しやすい内容であった。

「遺跡内分析」では日本からは赤山容造氏が唯一

発表を行なっていたのだが、遺構平面形をもって精緻な型式分類をする方法に対して、ヨーロッパの研究者は荒削りながら一步解釈を進めて遺跡で想定される男女の座の違いや廃棄行為のあり方などを検討しようとするものが多かった。日本でも遺跡内空間分析がいろいろ試みられているのだから、今後このような研究が国際学会で多数紹介されることを期待する。ソーレン・アンダーセン氏によるデンマークの貝塚についての発表は、1970年代に再開した調査の総括であるが、遺跡機能の研究にも及ぶものであり、スライドで示された40m近いトレンチ発掘の大きさには度肝を抜かれた。

夕方、エルヴェ・ヒルにある東洋美術館とラフカディオ・ハーン文化センターで、展示を見ながらレセプションが持たれた。また、中世のたたずまいそのままのダラム城の大ホールにおいて、晩餐会が盛大に催された。

【第5日目】9月8日

第7セクション「技術と物質文化」と第8セクション「農耕に向けて」の発表が行われた。発表順序の変更があり、第8セクションで予定されていたジャックス氏らの発表は第7セクションに、また、第6セクションで予定されていたケイナー氏の発表は、第8セクションの最後にもってこられた。

「技術と物質文化」では7つのうち4つまでが日本人による発表で、この種のテーマに取り組むことの多い日本考古学の現状が反映しているようでもあるが、会議全体から見た絶対数としては意外に少ないともいえよう。ロリー・コンウィ氏は、過去20年間のヨーロッパ中石器文化研究を総括し、解釈に用いられたアフリカなどの民族例と考古資料との違い、ならびに人工遺物の様式にみられる多様性と地域性を指摘した。また、海岸部遺跡の希薄な理由については、海水準変動による消失の可能性を指摘した。遺跡機能の分析では、特に生業の季節性を重視している点がスター・カー遺跡での視点を継承したものとして注意をひいた。

農耕に向けての発表ではさまざまなキーポイントについて農耕化の問題が論じられた。デンマークを中心に生業から原石採集活動、交易、居住など

の問題を概括したダグラス・プライス氏は、デンマークの中石器時代を「定住的フォーリジャー」の段階と農耕民との「接触」の段階、新石器時代を「最初の農耕民」の段階と「完全な新石器文化」の段階に区分した。フリント採掘遺跡の規模の大きさと構造、原石から精製された多量の石斧の調整技術と均質性の高さから、交易はもとより、石斧の所有権さえ存在したのではないかと主張していたのが印象的であった。発表後の議論では、縄文文化や中石器文化にみられる定住性や労働の集約性が次世代にどのように変容したのかについて意見が交わされ、民族誌的文脈から導かれたモデルが強引に採用されたために、社会的複雑性と労働の集約性が混同されがちだったのではないかという指摘もあった。

【会議全体の印象】

海外の研究事例では、遺物分析における編年や数量的分析の粗さが印象づけられたが、そのかわり上位概念の議論には深みがあった。特に、多くの研究者から中石器文化や縄文文化に対する狩猟・採集民モデルの誤用についての指摘が多かった。ただし、それらの議論も、ただ民族考古学に悲観的になるばかりでなく、個別研究の中でそれぞれ解釈を模索する「史料批判的」ともいえる姿勢が感じられた(深沢、ヤニック、ケイナーなど)。また、社会差別やジェンダー考古学、あるいは象徴考古学的アプローチをもった研究(ヤニック、ジャックス&カオなど)もめだち、研究動向をうかがえて興味深かった。一方、日本人研究者の発表には事例研究が多く、概念上の議論が少ない傾向がみられた。また、多くの欧米の研究者が中石器時代から新石器時代にかけての通時代的な文化変化の分析を提示したのに対し、このような発表は日本側には少なかった。時代区分の問題、労働の集約性、社会的複雑性などについても同様のことがいえる。

このような、欧米考古学と日本考古学との間にみられる研究傾向の相違については、これまでもいろいろ指摘されてきたことである。しかし、現段階ではこのような傾向をあまりマイナス評価す

る必要はないと思う。我われは、「生態と生業」をテーマに掲げた第4セクションでそれぞれ発表した。生態・生業の脈絡から他のセクションのテーマにアプローチすることもできるわけで、どのセクションで発表するかの迷いがあった。たとえば原始捕鯨の問題は、社会や宗教との関係で論じることができ、実際に既刊の論文でその面に言及している。今回それを発展させて上位概念に踏みこむことも考えなかったわけではないが、ヨーロッパではまだよく知られていないであろう、日本原始捕鯨の実態を示すことに重点をおいた方が今回は妥当ではないかと最終的に判断した。

今後、息の長い国際交流を進めるうえで、一考を要すると思ったのは、会議の持ち方についてである。特に二つの点を指摘しておきたい。

第一に言葉の問題である。英会話の苦手な日本人がいることを念頭において、つとめてゆっくりした口調で発表・発言するように主催者は配慮してくださったのであるが、ディスカッションに積極的に入っていった日本人は、林謙作氏をはじめ数えるほどしかいなかった。国内会議では必ず発言することをモットーとしている一個人としては、耳がついていなくて、もどかしい思いをした。考古学の国際会議においても同時通訳の体制をとりたいたいものである。自由時間には個々に話しがはずみ、あちこちの交流の輪のなかで、個別の情報交換はうまくいっているようであった。

第二にテーマの問題である。これは国際会議に限ったことではないが、テーマをしぼり、問題解決型の会議にしたほうが充実した展開がえられるのではないだろうか。たとえば、「狩猟・漁撈・採集民における複雑性についての考古学的諸問題」をテーマに掲げるとする。主催者は、あらかじめこれに関する既知の諸問題の解説を配布しておき、参加予定者は会議開催に向けてあらゆる面、あらゆる角度から問題解決にアプローチする。「複雑性」のように、科学論の課題となっているような用語または概念については、一応の概説を付しておくことも無用の混乱を防ぐだろう。これまで「複雑性」という概念をあやつらなかつた研究者も、自分

の研究歴を活かしてこの問題に挑戦する。当日はまさにシンポジウムとなる。これならば、テーマをしぼっても参加者の減少にはつながらないだろう。

各国の参加者の縄文文化認知度は意外に高いという印象を持ったが、それは数少ない英文での論文や紹介記事、一般書等で目に触れるといった程度であり、海外の研究者が積極的に考古学的解釈に関わるという機会は少ないために、相互の間に大きな距離を生み出してしまったようである。今回の国際会議は、彼我の距離を埋めるよい機会となったといえよう。今回の発表や議論をふまえ、縄文文化の国際的研究が進むことが予想される。そのためにも、発表論文集の早期出版を期待する。

さて、日本でこのような国際会議を開催するとしたら、組織をあげて実行するのが常である。ところが彼の地では、主催者個人（特にケイナー氏）が受付その他もろもろの世話をほとんど一手に引き受けて運営しているのである。京都大学の大学院生らが松井氏の指示のもと、アシスタントをつとめていたとはいえ、やはり日本とはだいぶ勝手が違う。個人主義の英国と集団主義の日本の違いが浮き彫りにされたようであった。

最後に、有意義に過ごした会議期間中の余話を少しばかり紹介しておこう。ケンブリッジではニューホールの新しい快適な施設に泊まったが、防火警報装置の感度がよすぎるのか、誰かが使ったシャワーの湯煙にたびたび反応して一同を驚かした。ドラムでは古城を利用した宿所があてがわれ、最後の晩にはロリー・コンイ氏の案内でふだん公開されていない地下礼拝堂などを見学したあと、松井氏がひとり持て余していた豪華な特別室に押しかけて二次会を開催。日本では酒を飲んだら歌をうたうもんだとロリー・コンウィ氏にいうと、ではとまず同氏が歌いだし、つづいて誰かさんが「荒城の月」、そしてイングランド、スコットランド、アイルランド民謡に由来する、昔なつかしい唱歌の大合唱となった。

会議終了後、筆者のうち、富岡はハドリアヌスの長城に始まりウェセックス地方のデヴァイゼズ



ダラム大学キャンパス内の Castle Hotel にて 1995 年 9 月 9 日 (日本時間) 撮影
真ん前が富岡直人、左端が松井章、階段の手すり際左からロリー・コンウィ、平口哲夫

博物館に終わるエクスカージョン(9日から12日まで)に参加した。平口はこれには参加せず、エジンバラをへてオークニー諸島に渡り、9月16・17日にグラスゴー大学で開催された海岸・海洋環境考古学会議にも出席、「日本と韓国における古代捕鯨」と題して発表、20日に帰国した。今回の国際会議への参加をよびかけてくださり、会議中はおもとより会議後もひとかたならずお世話いただいた主催者の方がた、ならびにケンブリッジ大学に留学中の深沢百合子さんに深く感謝申しあげる。

発表者(所属機関、所在国)・演題一覧

1. はじめに：縄文文化と中石器文化の研究
2. 更新世から完新世への変遷

パヴェル・ドルカノフ(ニューカッスル大学、UK)「北ヨーロッパにおける更新世から完新世への変遷」

クリストファー・トランスミス(ニューカッスル大学、U

K)「ブリテン諸島における更新世から完新世への変遷」

3. 社会・象徴・宗教

深沢百合子(ケンブリッジ大学、UK)「狩猟・採集民についての民族誌的類推の乱用」

リック・シュルティング(レディング大学、UK)「ブルターニュ地方におけるテヴィエク遺跡とヘーディック遺跡の中石器時代集団墓地の分析」

リリアナ・ヤニック(ケンブリッジ大学、UK)「東北ヨーロッパの漁撈・採集・狩猟民集団墓地における社会分化」

小林達雄(國學院大学)「縄文文化におけるモニュメントと景観」

トーマス・プロンカ(ウロツラフ大学、ポーランド)「ポーランド低部シレジアのポビエル 10 遺跡から出土した中石器文化の施文された人工遺物」

クリス・メイクルジョーン(ウィニペグ大学、カナダ)、エリック・ブリンク・ピーターセン(コペンハーゲン大学、デンマーク)「パラダイム喪失：中石器文化の複雑性の追求」

アーネスティーン・エルスター、マリアナ・ニコライド
ウ(カリフォルニア大学ロサンゼルス校、USA)「東北ギリ
シャのシタグロイ遺跡出土の貝製品：初期農耕社会におけ
る採集の象徴的意味」

プリシラ・レナウフ(ニューファンドランド記念大学、カ
ナダ)「バンドかバンドワゴンか：狩猟・採集民の複雑性と
考古学的記録」

ビッディー・シンプソン(カンブリア、UK)「我らのなか
の動物性：ブリテンと周辺における過去の狩猟・採集民の
イデオロギーと信仰体系を検討するためのアプローチ」

4. 生態と生業

リリアナ・ヤニック、マーチンジョーンズ(ケンブリッジ
大学、UK)「漁撈・狩猟・採集民社会における食物網と生
産様式」

ポール・メラース(ケンブリッジ大学、UK)「スター・カー
における新しい調査」

ハンス・ピーター・ブランクホルム(トロムソ大学、ノル
ウェー)「南スカンジナビアの後氷期初頭におけるマグレ
モーゼ文化の生業」

フランシス・B・ハロルド(テキサス／アーリントン大学、
USA)「アルバニア、ユニスボル洞穴の中石器文化」

平口哲夫(金沢医科大学)「日本における原始捕鯨の諸問
題」

サラ・M・ネルソン(デンバー大学、USA)「朝鮮半島に
おける原始時代の海岸遺跡」

サラ・メイソン、ジョン・ハザー、ゴードン・ヒルマン(ロ
ンドン大学考古学研究所、UK)「狩猟・採集民遺跡の考古
植物学」

中野寛子(ズコーシャ総合科学研究所)、中野益男(帯広畜
産大学)「糞石の脂肪酸分析による縄文食の環境の栄養化学
的復元」

パオロ・ピアギ(ヴェニス大学、イタリア)「オマン半島完
新世末の漁撈・採集民」

デヴィッド・ペリー(ニューヨーク・シティー大学、USA)
「ヨーロッパ中石器時代における植物質資源：ヘーゼル・ナ
ッツ(*Corylus avellana*)の役割を評価して」

ピーター・ウッドマン(ベルファスト大学、UK)「フェリ
ターの岩陰」

須藤隆、富岡直人(東北大学)「東北日本の縄文晩期社会に
おける生業活動」

ステューブ・ミーセン(レディング大学、UK)「スタオ
ズナイグ：スコットランドにおける貯蔵遺構と埋葬跡と考
えられる遺構を伴う中石器文化遺跡」

ユーリ・ボストレツォフ(ロシア科学アカデミー極東支部、
ロシア)「ボイスマン湾の環境と古人類」

内山純蔵(京都大学)「西日本における縄文漁撈：もう一つ
の海岸適応」

松井 章(奈良国立埋蔵文化財研究所)「東西の縄文文化：
経済基盤を比較して」

5. 領域性と景観

林 謙作(北海道大学)「縄紋社会における地域的結合力と
統合の諸段階：仙台湾地域における事例研究」

トロンド・クロングセト・レーデー(ベルゲン大学、ノ
ルウェー)「西ノルウェーの中石器文化における景観の概
念」

宮路淳子(京都大学)「大阪平野における狩猟・採集民の生
業と集落システム」

佐藤宏之(東京都埋蔵文化財センター)「縄文文化における
陥穴の社会生態学的研究」(西田泰民が代読)

ティム・シャドラーホール(レスターシャー博物館・美術
館、UK)「ピッカリング谷にみられるいくつかのパターン」

クヌート・アンドレアス・ベルグスィーキ(ベルゲン大学、
ノルウェー)「西ノルウェー海岸部における中石器・新石器
時代の狩猟・漁撈民遺跡の空間分布」

R・エスミー・ウエップ(ロンドン大学、UK)「多様性の
ある気候への対処：一定しない環境への在地的対応」

6. 遺跡内分析

赤山容三(群馬県立博物館)「縄文時代中期の集落と縄文人
の定住的行動：堅穴住居の分析」

オール・グレン(デンマーク・ロスキレ自然博物館、デン
マーク)「南スカンジナビアにおける中石器時代の住居構
造」

レケ・ヨハンセン(コペンハーゲン大学、デンマーク)、デ
イック・ステパート(フロニンゲン大学、オランダ)「北ヨー
ロッパの中石器時代遺跡を例とした遺跡内空間分析のため
のコンピュータ・パッケージ」

ソーレン・H・アンダーセン(オーフス大学、デンマーク)
「デンマークの貝塚：25年間の調査成果」

アレ・ヨハン・ネロイ(ベルゲン大学、ノルウェー)「西ノ
ルウェーにおける中石器・新石器時代遺跡の空間利用」

7. 技術と物質文化

阿部朝衛(帝京大学)「縄文時代の石斧交易：寺地遺跡の事例研究」

網谷克己(敦賀女子短期大学)「縄文時代前期の木製品にみる木材利用」

西田泰民(古代学協会)「縄文土器使用の研究」

ピーター・ロリー・コンウィ(ダラム大学、UK)「中石器時代における地域的な人工遺物の様式：それは何を語るか」

リー・ギーキル李起吉(朝鮮大学、韓国)「朝鮮の新石器時代における土器製作技術」

富井 眞(京都大学)「縄文時代中期終末における地域的土器型式の出現」

メアリー・ジャックス(エドモントン大学、カナダ)、カオ・チアン(半坡遺跡博物館、中華人民共和国)「陝西省西安半坡遺跡博物館所蔵の姜寨人の骨格資料」

8. 農耕に向けて

ルシアナ・ドマンスカ(ウォーチ大学、ポーランド)「北ヨーロッパ平原における農耕の起源」

藤尾慎一郎(国立歴史民俗博物館)「弥生時代がなぜ始まったのか」

エイスル・ブリュゲン・オールセン(ベルゲン大学、ノルウェー)「西ノルウェーの後期石器時代狩猟・漁撈民における定住性と農耕の開始」

高宮廣土(札幌大学女子短期大学部)「沖縄島における食料生産の始まり」

ミヒャエル・ブッジャ(リュブリアナ大学、スロベニア)「スロベニアにおける農耕化の過程：一つの地域的アプローチ」

家根祥多(立命館大学)「縄文文化から弥生文化へ：弥生土器の起源からみた西日本における農耕社会の誕生」

ダグラス・プライス(ウィスコンシン大学、USA)「ヨーロッパ中石器文化における複雑性」

サイモン・ケイナー(ケンブリッジ大学、UK)「縄文時代の人間活動史と社会関係」

(考古学研究第 42 巻第 4 号、1996 から転載、写真入れ替え)